

## 編集委員会便り

新年明けましておめでとうございます。皆様のご愛顧にささえられながら、本誌も今年で創刊15年目を迎えることができました。何卒、今後ともよろしくご愛読下さるようお願いします。

さて、本号の特集は「資料リサイクル問題」をとりあげました。地球環境問題の解決に関連して、リサイクル問題は重要なテーマであり、都市ゴミ問題とも関連して身近な問題としてとりあげられることが多い課題でもあります。本学会でも2年前から、大阪大学の鈴木胖教授を委員長とする研究プロジェクト「リサイクルシステムの総合的推進に関する調査研究」が発足しており、海外調査もまじえ精力的に活動しております。また、昨年10月大阪で開かれた本学会主催の講習会「資源リサイクル問題の核心」には、不況の時期にもかかわらず130名を超える参加者がありこのテーマに対する皆さんの関心の深さを感じました。

リサイクル問題を新年号の特集としてとりあげることは、半年程前の編集委員会で討議され、越後委員長から、研究プロジェクトと講習会の企画の両方に関与した筆者がそのとりまとめを仰せつかったわけです。講習会の内容を中心に構成し執筆して戴いたのが本特集であります。

前半は、大学の先生方を中心に、リサイクルの歴史的経緯、リサイクル社会へ向けての課題、最近話題の製品アセスメントとライフサイクルアナリシス等リサイクルシステム全般の課題、後半は、建設、プラスチ

ック、家電製品、自動車関係の専門の方々それぞれの業界の現状のとりくみと課題等について執筆をお願いしました。平成2年に制定されたいわゆるリサイクル法などの法制度、あるいは、外国の状況（特にドイツ・フランス等のヨーロッパ）についても別項目を設けてはという意見もありましたが、項目数などの関連で割愛し関係する個所に含めることにしました。

一般的に云って、地球環境問題をもちだすまでもなく、物の大切さ、勿体ないという東洋の考えを根底に持つ我々には、リサイクルの必要性は理解しやすいことでもあります。しかし、具体的にどれかにとりくむとなると大きな難問が山積しています。リサイクル技術の開発は勿論必要ですが、リサイクルを社会システムとしてくみこむことが必要不可欠なことと思います。現在の大量生産、大量消費、大量廃棄型社会からいわゆる循環型社会への転換は、我々のライフスタイルの転換とも係わり理屈と実行がなかなか合致し難い非常に困難を含んだ問題であります。まさに、我々ひとりひとりの意識改革を必要とする課題だと思いますがその難かしいなかで、リサイクルシステムへの動きが着実に進みつつあるというのが本特集をおえた感じです。

最後に、本特集をくむにあたりお世話になった方々にお礼申し上げます。

須納瀬 満 幸

(前 関西電力㈱ 研究開発室 研究開発調査役)